

『グリム童話集』より「恋人ローラント」(KHM56)の 主人公は誰なのか

10K060 梅川 勇紀

はじめに

「恋人ローラント」は『グリム童話集』の56番目に収録された、その名の通り一人の女性と彼女の恋人である「ローラント」という名の男性を中心に構成された物語である。

この童話は、ストーリーそのものは「悪い魔女である継母に虐げられているヒロインがそれに打ち勝って男性と結ばれてハッピーエンド」という、男女の立場さえ気にしなければグリム童話に限らず日本の昔話や世界中の伝説、はては現在世の中に溢れている小説や漫画やゲームなどによく見られるオーソドックスなものである。

だが、昨今のそれらと違い、この物語は今一つ「主人公は誰か」という点が不明瞭な所がある。本レポートでは各登場人物の役割や作中での働きから「この物語の誰が主人公なのか」について考えてみる。

1. 登場人物

「恋人ローラント」の登場人物を登場した順に挙げると、以下のようになる。

- ・魔法使いの女
- ・魔法使いの女の実の娘
- ・魔法使いの女の継子
- ・ローラント
- ・別の女
- ・羊飼
- ・神通力を持った女

ほんの7ページ半の物語の中に7人もの人物が登場していることには驚くが、「主人公」が物語に是非もなく欠かせない要素であることから、この7人の中の誰かが「主人公」であることは間違いない。

では、誰が「主人公」なのか。一人一人確かめてみよう。

2. 「魔法使いの女」

その女は、ほんとうの魔法つかいで、娘を二人もっていました。一人は、顔もみにくく、不良少女なのですが、これは実の娘なので、女はこの娘のほうをかわいがりました。もうひとりのは、きりょうがよく、気質も申しぶんないのですけれども、これは継子ですから、女はこの娘をにくみました。⁽¹⁾

これは金田鬼一が訳した『グリム童話集』に収録されている「恋人ローラント」冒頭の文章である。

この文を読んで分かる通り、「魔法使いの女」の立場はグリム童話ではよくある「意地悪な継母」、つまりは悪人である。

全部合わせて100をゆうに超える物語が収められている『グリム童話集』の中にはいわゆる「悪漢小説」と呼ばれる、悪人がそれに近い印象の人物を主軸に話が進んで行く物語も数こそ多くはないが幾つか存在する。それに当てはめれば彼女こそが主役といえるのかもしれないが、グリム童話の持つ暗黙のルールとして「意地悪な継母は罰を受ける」ため、彼女が「主人公」ということはありえない。

では、彼女の役割は何かと言えば、前述の文章からも分かる通り「意地悪な継母」と「悪い魔法使い」である。グリム童話ではどちらもよく登場する人物であり、主役とはいえないが、グリム童話では欠かせない役割をもつ。

3. 「魔法使いの女の実の娘」

では、魔法使いの娘たちはどうだろうか。前項の引用文で実の娘の方は「顔みにくく、不良少女」と描写されている。これはグリム童話のヒロインとして致命的である。なぜならば、これもまた暗黙のルールとして「ヒロインたるもの美人で優しく家事万能でなければならぬ」からである。「醜い顔」の時点ですでに彼女に幸せな未来は約束されていないのである。その証拠に、彼女は登場した次のページで物語から退場することになる。それももう一人の娘の身代わりとして母親に殺されることによってである。

そんなことをする継子の方にも「悪人」のレッテルが付きそうなものだが、そうなった経緯がそもそも実の娘が彼女の前掛けを欲しがり、それを聞いた母親が「丁度良いから殺っちゃおうか」と思い立ったことなので、グリム童話では許されることなのだろう。

知恵を働かせて魔女をオープンに叩き込み焼き殺した「ヘンゼルとグレーテル」や王子に助けられた後、目の前で継母を踊らせながら殺した「雪白姫」を例に挙げるまでもなく、グリム童話には「悪人への復讐なら殺人もやむなし」という風潮がある。その点で見れば、実の娘を自らの手で討たせることは、誰がどう見ても継母への「復讐」であり、継子の行動はむしろ「当然」と言えるのである。

そういう点で実の娘は主役でこそないが、この物語に出て来る人物の中で一番の被害者と言える。

4. 「魔法使いの女の継子」

自分が助かるためなら他人を身代わりにすることも厭わないもう一人の娘の方はどうだろうか。

物語冒頭の文章で見たように、彼女の描写には「美人」と「優しい」という、「グリム童話のヒロイン三大原則」の内の二つが早くも備わっている。その上、物語を読み進めていくと分かるが、最終的にハッピーエンドとなるのは、彼女とその恋人である「ローラント」である。その点彼女は「主人公」に最も近い、いや間違いなく「ヒロイン」に位置付けられる。

だが、作中で彼女がした行動はとて「優しい」と言えるようなものではない。いくら自分の命が懸かっているとはいえ、それで異母姉妹を斧の前に差し出すのはどう考えても「優しい」人間の所業ではない。

しかも、彼女が実の娘に対してしたことはそれだけではない。そうやって母親が勘違いをした際に継子は家を逃げ出すのだが、この時彼女は時間稼ぎのために切断された妹の首から3滴の血を床に垂らし、実の娘がまだ活着しているかのように装うのである。活着している時どころか死んでもなお、彼女は姉妹を「利用」したのである。普通に考えてこのようなことをする人間を「優しい」という者はいない。

だが、実はこれは改変の結果生まれた描写なのである。金田鬼一訳『完訳グリム童話集』2巻の「恋人ローラント」の話末には次のような文章が添えられている。

原本の初版には二人が逃げ出すとき、ちょうど、やくためにかまどにのせてあったお菓子のなかへ豆を一粒入れるという話がでています。⁽²⁾

現在、世界に広く知られている『グリム童話集』は、編纂をしたグリム兄弟の一人、ヴィルヘルム・カール・グリム (**Wilhelm Carl Grimm**) が元の話をもより子ども向けに書き直したものである。

そしてこの物語も例外でなく、彼の手が加えられている。修正が加えられていて、これである。一体どうして彼は彼女に当初のような平和的なまさしく「メルヘン」な方法ではなく、このような身の毛もよだつ手段を取らせたのか。その謎を解く鍵は使われたのが実の娘の「血」であることにある。

古来より「血」には何らかの魔術的な力があると信じられていた。黒魔術の儀式には生贄の血がつきものであるし、「血の契り」という言葉も存在する。吸血鬼は自らの糧として血を欲する。それだけでなく、邪悪な竜を討った英雄ジークフリートはその血を浴びることで不死身の身体となり、ペルセウスは己が刈り取ったメデューサの首から滴る血から生まれたペガサスに乗って、海獣に襲われているアンドロメダ姫を助けに行く。

ここで大事なのが、「英雄は血に助けられている」という点である。通常、明確な「殺意」を持って殺された者が、殺した相手を助けるということは考えられない。殺された者が抱くのは間違いなく「加害者への恨み」だと考えるのが普通だからである。

だが、「英雄」は例外である。先述したように、英雄伝説では、度々彼らは「血」によって新たな力を得、難局を凌いでいる。それは「試練」を乗り越えた彼らへの「褒美」のようなものなのかもしれない。「英雄」が相手である時、「死者」は恨みも何もなく、都合のよい援助者となる場合が多い。

そしてそれは、「恋人ローラント」の継子にも当てはまる。彼女が「英雄」であるという描写はどこにもないが、自分が打ち倒した者の「血」を用いることで、「英雄」という「絶対的な正義の立場である」ということを間接的に象徴していると読むことができる。

5. 「ローラント」

通常、物語の「主人公」には名前があって当然である。その点、彼はこの童話の中でただ一人、名前を持っている。しかも彼の名は物語のタイトルに使われている。「桃太郎」や「浦島太郎」、「金太郎」のように、題名がその話の「主人公」を示している物語は多く、その点を鑑みれば、彼が主役である可能性は大きい。

だが、グリム童話の世界では数少ない名前持ちは、逆に不遇のポジションに立つことも多い。「ラプンツェル」の「ゴテルおばさん」や「漁夫とその妻の話」の「イルゼビル」など、むしろ名前持ちは悪役にこそ多かったりする。

だが、彼は決して少女に仇なす悪人ではない。

きみ、にげるまえに、おかあさんの魔法の杖を奪つといでよ、さもなきゃ、おかあさんがうしろから追っかけてきたら、どうにもたすかりっこないぜ。⁽³⁾

この台詞からも分かる通り、彼は話の中で「助言者」の役割を与えられている。彼は義姉妹を身代わりに家から逃げてきた少女の恋人であり、彼女と手に手を取って逃避行するのである。

ここから話は追い掛けて来た魔女との戦いになるが、実際に活躍しているのはどちらかと言えば継子よりもローラントの方である。彼は継子が自分たちに掛けた魔法を上手く使い魔女から恋人を護り、ついには返り討ちにしてしまう。だがこの時、主に動いているのはローラントだけであり、娘の方は魔法を掛けた後はほとんど動きがない。「魔女退治」はこの物語の「山」とも言うべき部分であり、そこで活躍している彼こそが「主人公」と言ってもいいように思える。

6. 「別の女」

だが、ローラントの活躍はそこで終わる。魔女を倒した後で継子にプロポーズした彼は、しかし、帰った先で別の女性に拐かされ、自分の恋人のことを忘れてその女性にのめり込んでしまうのである。

この女性はいわば「第二の悪役」である。普通、グリム童話は悪い魔女などの試練を男女で乗り越えて、その先にハッピーエンドがあるという構成だが、それに当てはめると本来、この女性は必要のない要素になる。二人は既に「悪い魔女」という試練を乗り越えているからである。

では、彼女は一体何のために存在するのだろうか。私は、彼女が「継子にとっての試練」であるからだと考えている。

前述した通り、グリム童話はハッピーエンドの前に必ず「試練」がある。二人は既に魔女を倒すことでその「試練」を乗り越えているかのように見えるが、実はそれは「ローラントに対してのみ」のものであったのである。娘は「魔法」という手段を彼に与えておきながら、自身は基本的にその場に佇むだけで全てを彼に任せていただけである。他にも、「魔法の杖」の奪取を提案したのも、他にもないローラント自身であることも、この一件が究極的に魔女とローラントの知恵比べであることを暗に示している。

7. 「羊飼いと「神通力を持った女」

継母を倒した後を「第二の試練」と考えると、この二人も悪意こそないが「試練の一部」とであると取れる。

ローラントに忘れられた娘は悲嘆の余り花になるのだが、偶然その場を通りかかった羊飼いに摘まれてしまう。普通に考えれば、花が摘まれたらその時点でその命は終わりだと思うのだが、なぜか生き続ける娘は、これまたなぜか羊飼いの家で毎朝家事をする。

この家事云々については、またもや「グリム童話の暗黙の掟」が関係する。「ヒロインたるもの美人で優しく家事万能の原則」である。この内、「美人」と「優しい」は登場時からすでに描写されていたが、家事の腕前については実はここまで一言も書かれていない。つまり、このままではヒロインの要素が一つ欠けた状態で物語が進まなければならなかったのである。

だが、羊飼いによってその懸念は払拭される。彼の家で家事をすることによって、継子はその家事能力を示し、名実ともにグリム童話のヒロインたる資格を得たのである。

また、継子はこの段階で魔法の力を失っている。それは「神通力を持った女」によるものであり、継子を「魔法使い」から「普通の少女」に戻すことこそが彼女の役目だったのである。「魔女」に幸福な結末が訪れないグリム童話の「約束」上、ここで初めて彼女は「ハッピーエンドを迎える権利」を得ることになる。

しかし、後は結末まで一直線な彼女の前に一つの壁が立ち塞がる。それが「羊飼いの存在である。彼は花の正体を知った後、彼女に求婚する。童話の良くあるパターンとしては、このまま二人が結ばれてめでたしめでたしとなりそうなものだが、継子はこの誘いを断りローラントへの操を守り抜く。

これこそが彼女に与えられた「試練」である。ここで彼女はローラントへの変わらぬ愛を証明することで、ハッピーエンドへの道を開くことになる。

おわりに

この物語の各登場人物の役割を考えると、ローラントと継子はお互いに「守る側」と「守られる側」が場面によって入れ替わっていることになる。どうしてこのような形なのか。それはこの童話の裏に込められたメッセージが関係していると考えられる。

この物語は簡単にまとめると、「強い絆で結ばれた男女の男が浮気をし、しかし結局元の鞘に収まる物語」である。たとえ手に手を取って逃げても、一度ローラントは自分の恋人を忘れてしまった。しかし、最終的には彼は継子の元へ戻ってくる。その決め手は、彼女が抱き続けた愛であり、奪われた愛しい人の心はそれによって取り戻されるのである。

これだけ見るならば「愛」に溢れた実にロマンチックな物語である。子どもたちに聞かせたくなるのも無理はない。だが、この物語からは同時に女性に対する「浮気は男の甲斐性だから許せ」とでも言わんばかりの身勝手な押し付けのようなものも感じられる。「男が浮気していても、一途に愛し続けていれば戻って来てくれる。だから文句を言わず、ただ想い続けていなさい」という男尊女卑的な思考が見え隠れしているのである。

結局この物語が言いたいのは、やはりその一点なのだろう。だからこそ、この物語は前半でローラントと継子の愛を印象付け、後半では継子のローラントに対する偉大なる「愛の力」を示しているのである。

この物語はローラントと継子の二人が「主人公」なのである。

註

- (1) ヤーコブ・グリム、ヴィルヘルム・グリム（金田兜一訳）『完訳グリム童話集 2』岩波文庫、2011年、183ページ。
- (2) 同上、190ページ。
- (3) 同上、184ページ。

参考文献

村上リコ『英国メイドの日常』河出書房新社、2011年

池上良太『図解北欧神話』新紀元社、2007年

M・オールドフィールド・ハウイ（鏡リュウジ監訳、真喜志順子訳）『猫と魔術と神話事典』柏書房、2010年

(指導教員 桑原ヒサ子)